Interview

昔から身近な鉄は言葉も豊かどんどん使って人生も豊かに

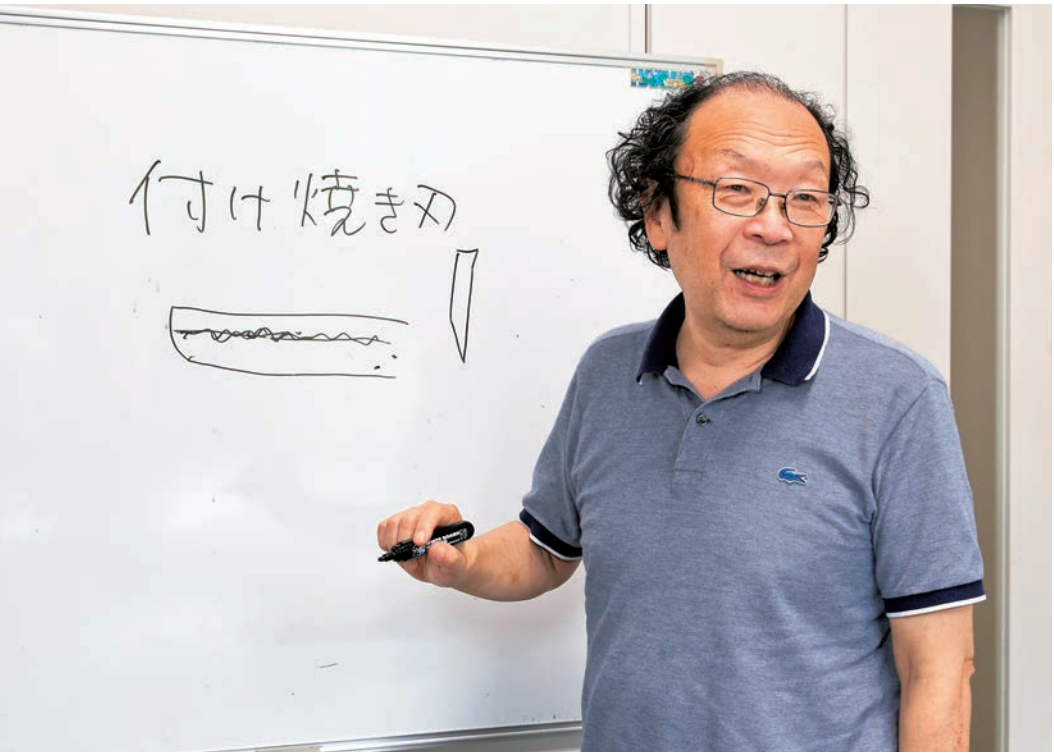
◉言語学者　金田一 秀穂 氏

鉄にまつわる言葉で、すぐに思い浮かぶものといえば、わりと刀関係が多いですね。「しのぎを削る」とか「つばぜり合い」とか。お侍さんがいたころだって、そうそう決闘の場面があったとは思わないけど、鉄でつくる刀という道具が日常だったんでしょう。

やっぱりふだんから身近にあるものが、いわゆる慣用句として残っていく。現代ならあちこちにクルマが走っていますよね。もともとはクルマの用語だけど、「急ブレーキをかける」なんてよく使うじゃないですか。ほかにも例えば、「ステージを上げる」なんて表現は、テレビゲームから来ていると思います。

「鉄は熱いうちに打て」と言いますけど、かつては村に鍛冶屋が当たり前のようにあって、鍬（くわ）などの農具をつくっていたわけです。そこで職人が作業する様子をみんなが目にしていたんでしょう。だから鉄の言葉は多いのです。

もっとも、言葉だけが残って実態が消えてしまっているものもあります。乳母車（うばぐるま）という言葉がありますけど、今どき乳母はいないでしょ（笑）。それでも残り続けているのは、乳母車と聞くと、優しく赤ちゃんを乗せているイメージが湧くからなんでしょう。ほかにも歯磨き粉、筆箱、下駄箱……。言葉としては使うけれど、実態がないものってけっこうあるんです。鉄関係でも、「付け焼き刃」なんて、ほとんど誰も見たことがないけど、よく使います。



しのぎを削るつばぜり合い

付け焼き刃

鉄は熱いうちに打て

あるものを何かに例えることを比喩と言います。昔から残り続けている比喩は、すごく気の利いた表現だったんでしょうね。ただ、それが今後もずっと残り続けるかはわからない。言葉というものは恣意的に定着させることはできませんから。

でも、そういう昔からある言葉は、できるだけ使ってほしいと思います。いわゆる手垢のついた言葉じゃなくて、ちょっと背伸びをした言葉をあえて使ってみる。そうやって語彙が増えることで、人間は世界の見え方が豊かになるし、それこそ人生が豊かになるじゃないですか。

言葉はファッションだと言われます。鉄にまつわる良い言葉もたくさんあります。その場に合わせて服を選ぶように、ぜひ鉄の言葉にも〝着替えて〟どんどん使ってほしいと思います。

（談）

金田一 秀穂（きんだいち・ひでほ）
1953年生まれ。83年東京外国語大学大学院博士課程修了。大連外国語学院、イェール大学、コロンビア大学などで日本語講師を務める。現在、杏林大学外国語学部教授。祖父は金田一京助、父は金田一春彦と3代続く日本語研究の第一人者。著書に『金田一家、日本語百年のひみつ』（朝日新書）、『「汚い」日本語講座』（新潮新書）など多数。